

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第42回 「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」、あるいは科学の言葉

「ジャワ文化では、詩的な形式で表現できるようになるまでは知識は知識と見做されない」

——アルトン・ベッカー

それは、こちらに渡って1年ほど経った時のことであった。日本でやった最後の仕事をこちらで纏めようと考えていたが、新しい領域の膨大な要求がすぐにはそのような精神的、物理的余裕をわたしに与えてくれなかった。結局、1年ほどしてその余裕ができたので纏めて雑誌に投稿した。科学から哲学に入った当初、主観を抑制することなく長々と書かれた仏英の論文を読みながら、これでも論文なのかと驚いていたが、その頃には既にどっぷりとその文化に浸っていた。そして、返って来たコメントを読み、二つのことに驚いたのである。一つは、そこにある何の魅力もない記述が殺伐としたものに感じられたことで、これまでこのような文章に向き合っていたのかという驚きであった。もう一つは、そこにある問いに答えたからといってわれわれが生きる上には何の意味もないという反応が湧いてきたことであった。勿論、研究者として生きている時にはそんなことを感じたことは一度もなかった。その問いに答えることこそが優れた職業人であると考えていたからだろう。この経験は自らの視点の変化が相当に大きなものであること、そして科学という営みが人間の持つ重要な部分を除外して初めて成り立つ極めて特殊な領域であることに改めて気付かせてくれたのである。

こういうこともあった。2012年の暮れ、わたしが帰国の度にかいているサイファイ・カフェ SHE に参加されている方から新聞の切り抜き記事が送られてきた。日本経済新聞に連載された利根川進 (1939-) 博士の「私の履歴書」であった。届いた博士の文章を読み始めてすぐ、5年前であれば感じなかったであろう衝撃を受けたのである。辺り一面がフランス語で書かれた哲学で覆われた中から浮かんできたその文章が、情感や複雑な感情を呼び起こすことのない事実だけを伝える極めて簡素なものだったからである。ドイツ語で *sachlich* とでも形容したくなる、分かりやすいが無味乾燥なものであることに驚いたのである。

2013年には、このシリーズを読んでいる方が感想をこう語ってくれた。これまでと

はどこか違う新鮮な世界が広がっているように見えるとした上で、書いてある「こと」には新奇さは感じないのだが、と付け加えた。その言葉を聞いて思い出したのが、本居宣長（1730-1801）の「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」の一節である。宣長は『国歌八論斥非再評の評』の中でさらにこう続けている。

「然レバ、姿詞ノ髣髴タルマデ似センニハ、モトヨリ意ヲ似セン事ハ、何ゾカタカラ
ン、コレラノ難易ヲモ、エワキマヘヌ人ノ、イカデカ似ルト似ヌトヲワキマヘン、
試ニ、予ガヨメル萬葉風ノ歌ヲ、萬葉歌ノ中へ、ヒソカニマジヘテ見センニ、此再評
者、決シテ辨ズル事アタハジ、是ヲ名ヲ顯ハシテ、コレハ予ガ歌、コレハ萬葉歌ナリ
ト云テ、見セたらバ、必予ガ歌、似セ物ナリト云ベシ」



本居宣長四十四歳自画自賛像(部分)

安永2年(1773年)

©本居宣長記念館

宣長の意味したところを小林秀雄（1902-1983）氏がその著『本居宣長』（新潮社、1977年）の中で解説した一節がある。少し長いですが、以下に引用する。

「——この宣長の冗談めかした言ひ方の、含蓄するところは深いのである。

姿は似せ難く、意は似せ易しと言つたら、諸君は驚くであろう、何故なら、諸君は、むしろ意は似せ難く、姿は似せ易しと思ひ込んであるからだ、先づさういふ含意が見える。人の言ふことの意味を理解するのは必ずしも容易ではないが、意味もわからず

口真似するのは、子供にでも出来るではないか、諸君は、さう言ひたいところだろう。言葉とは、ある意見を傳へる爲の符牒に過ぎないといふ俗見は、いかにも根強いのである。古の大義もわきまへず、古歌の詞を真似て、古歌の似せ物を作るとは笑止である、といふ言ひ方も、この根強さに由來する。しかし、よく考へてみよ、例へば、ある姿が麗しいとは、歌の姿が麗しいと感ずる事ではないか。そこでは、麗しいとはつきり感知出来る姿を、言葉が作り上げてゐる。それなら、言葉は實體ではないが、単なる符牒とも言へまい。言葉が作り上げる姿とは、肉眼に見える姿ではないが、心にはまざまざと映ずる像には違ひない。萬葉歌の働きは、讀む者の想像裡に、萬葉人の命の姿を持込むといふに盡きる。これを無視して、古の大義はおろか、どんな意味合が傳へられるものではない。『萬葉』の秀歌は、言はばその絶對的な姿で立ち、一人歩きをしてゐる。その似せ物を作るのは、難しいどころの段ではなからう。

意は似せ易い。意には姿はないからだ。意を知るのに、似る似ぬのわきまへも無用なら、意こそ口真似しやすいものであり、古の大義を口真似で得た者に、古歌の姿が眼に入らぬのも無理はない」

実は、わたしも小林秀雄氏が言う「諸君」の一人として、「意は似せ難く、姿は似せ易い」と考えていたことがある。しかし、その考えは次第に変わって行つた。小林秀雄氏の言葉で、それがよりはっきりした形で見えてきたのである。ある「こと」の内容を語ることは、誰にでもできることである。情報の伝達だけを問題にしている場合には、内容が伝わるかどうかだけに注意が行き、その先が眼に入らない。先にある問題とは、それをどのように語るのかということである。美しい形、説得力のある形、思索を刺激する形などに変えていくのは誰にでもできることではない。意は真似できてもそれを表す姿は真似できないということになる。それが芸術作品か否かを定めることになるというのが、宣長の主張なのだろう。

科学の文章は事実を如何に正確に伝えるのかに重点を置いている。同様に、現代のほとんどの文章は情報を伝える手段としての役割を担っている。あるいは、そのように墮しているように見える。それは「意」が伝えられれば良しとし、「意」が得られれば良しとする精神状態にわれわれが陥っていることを示している。「姿」への配慮を欠いても意に介さない姿勢がそこに見えてくる。「言葉が記号化される」という言い方を聞くが、その状態はまさにこのことを言っているのだろう。文章が消費財となり、情報伝達が終われば用済みになる。ほとんどの科学の文章は図書館やネットの空間に眠ることになる。

リチャード・ファインマン (Richard Feynman, 1918-1988) 博士はほぼ半世紀前の講演で、現代科学の状況をこう分析している (大貫昌子訳『科学は不確かだ!』、岩波書店、2007)。

「科学が芸術や文学、人間の精神的姿勢や理解などに大きな役割を果たしていないという点では、僕は現代を科学的時代だとは思いません」

この指摘は半世紀を経た現在でも当て嵌るだろう。われわれの時代を科学時代とするためには、何が必要になるのだろうか。科学の成果を実用への貢献だけで判断する単線的な思考やその成果を分かりやすく翻訳して伝えるという考え方だけで、人間の精神的姿勢に影響を与えることが期待できるだろうか。それだけでは、わたしが言うところの「知識で終わる世界」(252巻2号)になってしまう。そこに一ひねりも二ひねりも工夫を加えた作業が必要になるのではないだろうか。さらに、影響を与えるべき芸術や文学などの背景に対する理解も不可欠になるだろう。



「科学」(Scientia)

ジュール・カヴリエ(Jules Cavalier, 1814-1894)作

ボルドー大学医学部正門

(2014年10月26日)

シドニー・ブレナー (Sydney Brenner, 1927-) 博士は、科学者が蓄積した膨大な量の情報をどのように知識に変換するのかがこれから重要になると考えている。確かに、

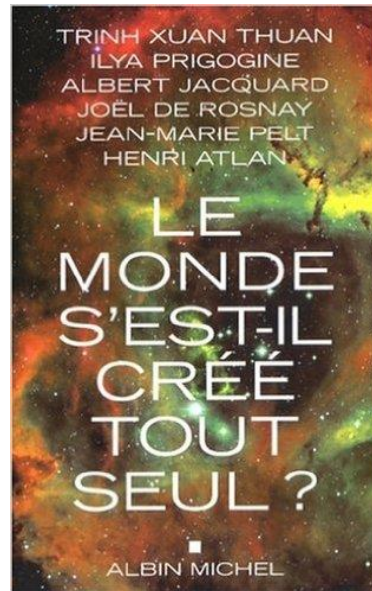
科学の営みから生まれた成果が歴史の闇に消えるのを待つだけだとすれば、人類にとって大きな損失になるだろう。博士の主張こそ、科学を十全に生かす上で欠かせない、しかも面白さを秘めている作業に見える。ただ、科学の情報を知に変換するプロセスの必要性は一般にはほとんど理解されておらず、財政的支援もない状態にあると博士は指摘する。それなしにはシーシュポスの歩みのようにも見えるプロジェクトに人は入っていくことはないだろう。われわれが今すぐできる一つのこと、いつの間にか失われてしまった態度、すなわち意識的に自らの専門を出て「領域を超えて・・・について語り合う」という態度を取り戻すことではないだろうか。そして、そこで重要になるのが専門を超えて有効性を持つ言葉になるだろう。

リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins, 1941-) 博士は、ご自身の著作以外にも科学者の素晴らしい文章を集めたアンソロジー *The Oxford Book of Modern Science Writing* (Oxford University Press, 2008) を出している。博士のベストセラー *The Selfish Gene: 30th Anniversary Edition* (Oxford University Press, 2006) (日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水雄二訳『利己的な遺伝子 <増補新装版>』、紀伊国屋書店、2006) の1989年版へのまえがきの中で、科学の表現にも関係する次のような考察を展開している。

「科学者ができる最も重要な貢献は、新しい学説を提唱したり、新しい事実を発掘したりすることよりも、古い学説や事実を見る新しい見方を発見することにある場合が多い。・・・ わたしは科学とその『普及』とを明確に分離しないほうがよいと思っている。これまでは専門的な文献の中にしかでてこなかったアイデアを、くわしく解説するのは、むずかしい仕事である。それには洞察にあふれた新しいことばのひねりとか、啓示に富んだたとえを必要とする。もし、ことばやたとえの新奇さを十分に追求するならば、ついには新しい見方に到達するだろう。そして、新しい見方というのは、わたしが今さっき論じたように、それ自体として科学に対する独創的な貢献となりうる」

30年前、フランスの北東部の町メス (Metz) にヨーロッパ・エコロジー研究所を創設し、科学の普及に力を注いでいるジャン・マリー・ペルト (Jean-Marie Pelt, 1933-) という植物学者にしてエコロジストがいる。基本的には還元主義の科学を批判的に見ており、人間そのものを自然の中に在る生き物として捉える目が失われていると憂いている方である。『世界は単独で創世されたのか?』 (*Le monde s'est-il créé tout seul ?* Albin Michel, 2008) という対談本の中に他の5名の科学者、チン・スアン・トゥアン

(Trinh Xuan Thuan, 1948-)、アルベール・ジャックール (Albert Jacquard, 1925-2013)、アンリ・アトラン (Henri Atlan, 1931-)、ジョエル・ド・ロネ (Joël de Rosnay, 1937-)、イリヤ・プリゴジン (Ilya Prigogine, 1917-2003) とともに収められている。この中で、ペルト博士は次のようなことを語っている。



『世界は単独で創世されたのか？』

科学はある現象の目的についての答えを出せない。目的は科学の営みから排除されているからである。科学のできる範囲で解析し、その範囲を超えるものは科学者の頭の中には存在しなくなる。科学者である博士はこの立場を受け入れながら、もう一方の極にも足を置く。科学者は帰納や演繹の論理に生きる言わば左脳の人たちだが、直観、情緒、感受性の右脳も使うべきではないかと主張している。その上で、科学という営みと人間としての営みとの隔絶に苦しんだ科学者の例を出している。その一人がダーウィン (Charles Darwin, 1809-1882) である。彼は人生の終わりを迎え、二つの悩みを抱えていた。一つは、信心深かった妻との間に広がることになる神の存在に関する精神的な隔絶である。もう一つは、彼の内面が砂漠のように無味乾燥としたものになり、右脳に依存する芸術も詩も音楽も味わうことができなくなっていたという。ペルト博士は、現代科学がまさそうになっており、われわれが賢者の世界ではなく、技術者の世界に生きざるを得なくなっていることを憂いている。もう一人は「農芸化学の父」とも称される 19 世紀ドイツの化学者ユストゥス・フォン・リービッヒ (Justus von Liebig, 1803-1873) である。彼は若き日に観念論者フリードリヒ・シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, 1775-1854) の講義を聴き、自然哲学を拒否して唯物論の枠

内で仕事をすることにする。しかし、ペルト博士によれば、リービッチは人生の最後に自分は間違っていたのではないかと考えるに至ったという。

科学者が哲学を語り出すともう終わりだという類の話は昔からよく聞かれる。わたしも現役時代には同様の考えを抱いていた記憶がある。確かに、科学がその人間の全世界になるとそう見えるのかもしれない。しかし、そこを離れた広大な世界から科学を見直すと、この見方にこそ変更が求められそうである。一つの領域を大きな枠組みに入れ直して考えることが、今必要不可欠に見えるからだ。そのためには科学の世界から物理的あるいは精神的に一度は出なければならず、そこでも改めて言葉の問題が現れるだろう。

現代科学の特徴を宣長に倣って言うとしたら、「意は捉え難く、姿は似せ易し」となるだろう。しかし、「姿が似せ難い」科学の文章はあり得るのだろうか。現在定義されている科学に限ると、その可能性は極めて低いように見える。ただ、このシリーズで何度か触れてきた「科学の形而上学化」(244 巻 6 号、250 巻 11 号)の下、科学と哲学を含めた他の領域が実質的に一つに纏まった全体を新たな科学と定義した場合、それは必然になりそうである。それが実現した時、われわれの時代がファインマン博士の言う真に科学的な時代に入るのかもしれない。

ここまで書いた時、スティーヴン・ホーキング (Stephen Hawking, 1942-) 博士が昨年末、「科学コミュニケーションに対するスティーブン・ホーキング・メダル」(Stephen Hawking Medal for Science Communication) の創設を発表したことを知った。対象となるのは、科学、芸術、映画の三つの領域とのこと。他の領域にも視野を広げることにより科学が日常に降り、われわれのものの方見方に変更を迫る一助になることを期待したいものである。

(2016年2月2日)